

### 13 過去10年間に当院で経験した18トリソミー 合併新生児に関する考察

山崎 肇・永山 善久・大石 昌典  
佐藤 尚・阿部 忠朗・田中 岳

新潟市民病院総合周産期母子医療センター  
新生児内科

【対象】2006～2016年に経験した11名(男/女:2/9名, 院内/院外出生:4/7名)

【結果】(1)入院中1名, 死亡退院5名, 在宅移行5名(後日死亡). 死亡例の70%(7/10)が生後6か月以内であった.(2)全例に先天性心疾患を認め, 外科的対応例は1名(肺動脈絞扼術と動脈管結紮術)であった. 5名に不整脈を認め, 臨床経過に影響した.

【結論】肺血流増加と不整脈への対応が, 臨床経過に影響する.

### 14 胎児診断された先天性心疾患児の予後の検討

関塚 智之・白田 東平\*・鈴木 亮\*  
星名 潤\*・庄司 啓介\*・斎藤 朋子\*  
金子 孝之\*・谷地田 希・田村 知子  
田村 亮・吉田 邦彦・五日市美奈  
能仲 太郎・生野 寿史・山口 雅幸  
高桑 好一

新潟大学医歯学総合病院  
総合周産期母子医療センター  
同 小児科\*

2012年4月～2017年3月の5年間で, 当院NICUに入院した先天性心疾患児は187名であった. 心疾患の内訳, 合併症, 胎児診断率, 出生後経過などにつき後方視的に検討した. 胎児診断されず新生児搬送された先天性心疾患児は, 出生後重症化し緊急治療を要するリスクが高かった. 胎児診断され当院で出生した児の経過は比較的良好だった. 先天性心疾患の胎児診断は, 出産後の治療開始をスムーズとし, 重症化の回避に寄与すると思われる.

## II. 特別講演

「小児高度医療機関, 大学病院小児科が小児在宅医療に取り組む意義とは」

国立研究開発法人国立成育医療研究センター  
総合診療部 在宅診療科医長  
医療連携・患者支援センター  
在宅医療支援室 室長

中村 知夫